新聞小説の発生

——熊本新聞を読んで——

本田康雄

要旨　明治初期の熊本新聞の雑報（三面）記事を読んで「続きもの」の発生と新聞小説へ発展する過程を考察した。熊本の町や村の事件の報道が大変面白く、購読者の人気を得たものについては連載が始まった。次いで雑報記事を編集した（現代の週刊誌の場合と同様）実話の連載（続きもの）が盛んとなり、この延長線上に明治二十年頃「小説体の続きもの」（創作）が登場した。これが新聞小説である。これは一、坪内逍遙の小説論に導かれたものである。二、この頃、専門の作者（作家）が現れ、新聞（雑報）記者が三面記事と続きもの（実話）の両方を担当した時代は去った。三、但し、新聞小説の紙面の形態（絵入続き物語、現代も同様）は実話の続きものの時代に決定しており、この旧い形態の中に新しい「小説」が連載されることとなった。おわりに熊本新聞の場合を参考として「新聞小説」一般の発生の問題にふれ、平仮名絵入新聞の「岩田八十八の話」「金之助の話説」が当時としては普通の雑報記事の連載であって、これを特に新聞小説の嚆矢とする定説についての疑問を略記した。

熊本県は朝日新聞の池辺三山、毎日新聞の本山彦一、国民新聞の徳富蘇峯をはじめとして多くの新聞人を産んだところである。彼等の郷土であり、青年時代を過した熊本においても、はやくも明治七年九月より「白川新聞」（明治九年三月より「熊本新聞」と改題）[1]が発行されこの地の情報の調査、収集、提供活動の中心となった。同時にこの文明開化期の新しい金属（鉛）の活字による〝新聞〟が熊本県民の毎日の必須の読みものとなったのである。私は近年、わが国の新聞小説の発生に興味を持って調査[2]しているが、熊本新聞を調べようと思ったのは次の二、三の理由からである。一は熊本では明治二十年頃まではこの新聞一紙を調べれば新聞社、新聞記者、また読者の状況を知り得るので、いくつもの新聞が競争して複雑な東京、横浜、また関西の都市よりは比較的単純、明瞭に新聞小説発生の状況が分るのではないかと考えたこと、二は当時、急速に全国一斉に新聞が創刊されて、中央紙の動向はスピーディーに地方紙に反映している様なので、熊本新聞について考察したことは、また他の多くの地方紙についても大略同様の傾向を想定し得ると思ったこと、三に敢えて記しておけば、私は熊本の出身で土地勘があり、この新聞の三面の雑報記事や続きものを読むのに適しているとするいさゝかの自信があったこと、等である。そして、恰度、熊本新聞を読みはじめた矢先に熊本市で講演する機会を与えられ[3]新聞小説の発生について一時間講師を勤めた。以下はその講演の要旨を骨子としてその後検討したところを加え、特にこの新聞の当時の読者・購読者の立場を想像しつゝ熊本での新聞小説の発生を考察したものである。

一　はじめに

明治三年（一八七〇）に「横浜毎日新聞」というわが国ではじめての金属活字（長崎の本木昌造製作）による日刊紙が現われ、以後急速に全国各地に活字の新聞が現われた。明治六年の文部省報告によると全国で七九紙、翌明治七年

にさらに一九種増え、その中に「白川新聞」があり、熊本の新聞では一番古い。（「明治事物起原」上巻）

白川新聞[4]は明治七年九月の創刊であるが、これは、東京ではじめての日刊紙「東京日日新聞」の創刊が明治五年二月、小新聞[5]の元祖「平仮名絵入新聞」の創刊が明治八年四月（九年三月、東京絵入新聞と改題）であったことゝ較べてもかなり早い時期の創刊である。明治のはじめの熊本ではこの熊本新聞が勢力があり、他には「熊本毎日新聞」（明治十一年十月十日創刊、同年十二月廃刊）、「東肥新報」（明治十四年七月創刊、十五年七月廃刊）、「日本新聞」（明治十四年十月創刊、同十五年二月、不知新聞と改題、同年十一月廃刊）、「いろは畫入新報」（明治十五年四月創刊、同年八月廃刊）があったが、いずれも短期間で廃刊となった。たゞ、明治十五年六月二十三日創刊の「紫溟新報」（紫溟雑誌を改題）は二十一年十月九日に「九州日日新聞」と改題して熊本県最大の新聞となるが、明治二十年頃までの熊本県の新聞界の動きは先ずは熊本新聞を読んで判断することが出来る。（宮武外骨稿、西田長寿補「明治前期新聞創刊年表」―明治文化全集四新聞篇―参照）

本稿は熊本新聞によって新聞小説発生の状況を考察するのであるが、新聞小説の発生についてはすでに定説となっている諸家の見解の紹介をかねて小論を発表した。[2] 従来説かれているのは「岩田八十八の話」（平仮名絵入新聞、明治八年十一月二八日から三〇日まで）、「鳥追阿松の伝」（仮名読新聞、明治十年十二月一〇日から十一年一月一〇日まで）、「毒婦お伝のはなし」（仮名読新聞、明治十二年二月一、二、四日）、「其名も高橋毒婦の小伝・東京奇聞」（東京新聞、二月より四月まで）といった小新聞の雑報記事の連載が読みものとしての「続きもの」へ展開するとする。雑報記事（ニュース）から続きもの（創作）への発展の過程に新聞小説の発生を考えようとしているのである。そして、その続きものの第一号として「金之助の話説（はなし）」（東京絵入新聞、明治十一年八月二〇日―二八日。九月三日―一二日）。が挙げられている。

しかし、雑報記事の連載から創作・フィクションである新聞小説が生まれる過程はかなり複雑で飛躍があり、その点について十分に説明が尽されているとはいえない。雑報記事の書き方そのものが戯作風で興味本位でありどこまで真実か疑わしいものが多い。しかし報道の記事であることは間違いない。この種の虚実半ばする文章が読者に支持されて連載がはじまり、次にはこの種の報道に基づいて編集された実録風の読みものの連載が提供される。これらを実際に読んでみると社会面（三面）のニュースなのか、嘘まじりの実録なのか判断に迷い、またそこが面白いのであって、到底整然と区別することは出来ない。

一回限りの雑報記事であっても大変面白いものがあり、一回限りか連載かを区別することにそれ程意味があるとは思えない。時には雑報記者の気紛れで続報を書くのが面倒で一回で打切ったり、調子に乗って書き続けたりした場合も多い様である。また雑報記事を編集した実録風の読みものは当然、雑報・ニュースと切り離せないのであって、例えば今日の新聞記事が一週間おくれて週刊誌で読みものとして再登場するのと似ている。どこまで行っても実録は実録であって、独立した創作とは異質なのだ。

この様な新聞の三面に創作の読みもの、新聞小説が登場することについてはなお考察すべき問題が多く残されているのではなかろうか。今般、熊本新聞を読んで気付いた点を列挙してみると、一は明治十年代の終りに専門の作家が続きものゝ書き手として現れ（それまでは三面を担当する雑報記者が執筆した）、同時に「続きもの」という読みものゝ性格が変化し、読者（新聞の購読者）に対して「小説体の続き物」として明確に定義ずけられて示される様になった。二は、このことゝ関連して新聞の三面のスペースの一部が今日の新聞にみられる様に、新聞社、新聞記者の直接の管理を離れて専門作家（と挿絵画家）に任せられることゝなった。また三として、この様な動きと併行して、熊本新聞の読者の立場から考えると、読者が住っている町とか村とかに起った事件についてのニュース乃至実話・実録

を熊本新聞が取材し地元の住民が読んでいたのが、次第に地元の話、身近かな話が少くなり、例えば東京の話、大阪の話となり、一般性のある読みものとなって、それを熊本の人が読む様になったと思われる。地元の実話にのみ興味を持っていたのが中央の話を読む様になった。この様な続きものの変遷の過程にまだ肥後の細川藩時代の生活が継続していた明治初年の庶民文化から東京を中心とする全国共通の文化が成立する明治二十年代までの熊本新聞における文明開化の足跡がみられるのではないか。この辺のことについて以下、熊本新聞の続きものを解説してみたい。

二　雑報記事の連載

『恋衣故郷錦』以下の続きもの（連載の読みもの。見出しの題名・作品名と回数の表示がある。）について述べる前に雑報記事が大変面白く、その中には記事の末尾に「……以下次号」などとして数回続くものもみられるので特徴のあるものを選んで解説してみたい。（年表参照）

一例として明治十三年七月一三日の三面（雑報欄）に次の記事がある。（以下、それ〴〵の記事の要旨を梗概風にまとめておくことゝしたい。）

（要旨）　北坪井見性寺近辺にて豆腐を営業とする稲葉利平の長女・お多寿（たす）は二十三歳で色も絹漉しの様に白く大変な美人。この看板娘のお蔭で豆腐がよく売れた。しかし、あまり別嬪すぎてつりあいのとれる相手もなく空しく年月を送り卯の花の顔（かんばせ）も容色おとろえ、親も心配になってきた。そこへ一人の好男子（よかおとこ）が現れた。「三々九度の次第は次の幕」。

簡単な文章だが、何時、何処で、誰れが、何を、何故、どの様にという五つのWと一つのHを押えてニュースの書き方になっている。「三々九度の次第は次の幕」と急に文章を打切って明日の三面に期待を持たせるのも雑報記者の腕

の見せどころであろう。しかしこの「次の幕」は私が何度も調べても出て来ない。実はこの頃の記事の書き方は大変おゝらかなもので「また明日」とあっても明日、続きの記事があるとは限らない。取材を中止したのかと思うと四、五日あとに出てくる場合があり、出てこない場合もある。本稿末にこの種の雑報記事（二回以上）の年表をあら〳〵作成して付載したが、初出の年月日はともかくその後の月日、回数などの細部については「乞御容謝」をお願いしたい。

明治十二年六月四日から掲載された『遊君おけいの伝』もどうも二回目（六月八日）で途切れたらしい。この記事は「阿芸（おけい）ちゃんは……」と書出して（この種の雑報記事連載の場合には「某々の伝」「某々の話」と見出しが付く。これは作品名とはいえない。年表参照。）

（要旨）遊君おけいは兵庫県神戸の稲荷新地の娼妓で、出始めの頃から金之助という色男が通いつめた。お腹が大きくなって金之助は喜びその安産を祈ったが、おけいちゃんはさっさと流してしまって大喧嘩となる。その中におけいちゃんはドロンをきめて行方不明、金之助大いに慌てる。実はおけいは長崎、博多を経て二本木の揚屋――ここから熊本の雑報（はなし）となる――にきて娼妓となった。金之助はあとをつけて熊本へ来て、おけいの居場処を調べている由である。

文末に「アトは明日」とあるが、二回目は六月八日に掲載されており

（要旨）金之助――金公とある――はついにおけいの居場所をつきとめた。お互にうらみつらみを述べたあと、元の関係に戻った。

これも文末に「アトは明日」とあるが、この二回で途切れている。書くことがなくなったのであろう。

明治十三年六月三〇日から九回（六月三〇日、七月二・六・七・九・一二・一五・一六・二九日）にわたって掲載された『節婦おともの話』はかなりの長篇である。

（要旨）おともの父庄作は鮫島某が金持らしいのでたいした人物ではないが娘の婿にして自身の借金の返済をして貰おうとする。おともはいやがり……「両親の前に泣き伏したり。この結末は如何ならん。以下、次号」（七月二日）とある。遂に無理やり結婚させられるが、おともは新時代の強い肥後の女であって断固として夫と同衾しない。これがテーマの「節婦」たる所以である。そこで、夫は憤り出し、父・庄作も婿に同情し、また借金を返して貰うため一緒になって打擲するので可哀そうにおともは生疵がたえない。それでもおともはいうことをきかないので座敷牢に入れられる。近辺の人達はかねて真面目で評判のよいおともさんに同情して戸長役場（後の町や村の役場）へ届け出る。役場もおともに同情して、夫の鮫島に、取調べのため午前八時出頭する様命ずるが鮫島は頑として応じない。

以上、六月三〇日より七月一六日まで八回、二、三日おきにこの記事がみられたのに、このあと七月二九日まで二週間、記事がない。そして同日の記事一回分で話を終らせている。

（要旨—最終回）夫の鮫島は実は一文無しの詐欺師であり、ある夜明け家出して行方知れずとなった。庄作は六十日間ただ食いされた、食い逃げだ、と怒る。しかし、節婦おともは無事で大いに喜んでいる。

読みものとしては突然、無理に結末とした感じだが結婚詐欺の雑報だとすればこの最終回の記事が重要なのかも知れぬ。こういう物語の出鱈目さまた面白さが当時の雑報記事であった。

明治十四年六月二〇日から（七月六日まで六回）掲載された『高口某の話』はこの電信局に勤める人物が毎晩料理

屋へ通い三人の女をつくったが、その中の一人の女と新細工町に新世帯を持つことになった、という話。最終回（六回目）の末尾に「右の件につき尚種々の報知あれば号を逐ふて掲載すべきなれども事実の相違したる報知なりとの確証を得たれば筆を本日に留め且前号の掲載を抹殺す」とあってこの連載記事は終っている。「前号」というのがどこまでかゝるのかはっきりしないが、多分、この連載記事の全部にかゝるのではなかろうか。今更「抹殺す」と言われても六回も読まされた読者はどうなるのか。そんなことには全くお構いなしのいかにも堂々とした謝罪しない訂正文を掲げて終っているのである。

三　続きものの展開

続きものは、直接報道を目的とする記事（三面の雑報記事・ニュース）ではなく題名（見出しとして冒頭に掲げてある）のついた読物として提供された連載物語である。しかし、本稿で扱った明治二十年頃まではすべて熊本でおこった実際の事件に取材した読みもの（実話）が中心であって、雑報記事と密接な関係がある。特に前述した雑報記事の連載とは深いかゝわりがあると思われるのでその点を考察してみたい。

『恋衣故郷の錦』は明治十三年九月一日より七回（九月一・二・三・四・六・七・八日）にわたって連載された。「花の熊本白川の流れに沿ひたる川の名の町の辺り」（川尻町。本田注）に住む〝おきく〟が女主人公である。第一回の記事によるとこの女は一昨年春、ある青年と「甲佐の里」（甲佐町）へ駈落して浮名を流し新聞へ出た、とある。それが、いつか人の噂も消え、相手の男は出世の心を抱いて東京へ去ってしまった。（この男との関係はこれで終り、おきくには沢山男がいて忙がしい。本田注）おきくは書の学びや裁縫に励みます〳〵きれいになる。

白川の町のほとりに「湧出る泉ではなく湯の傍に梢も茂る杉乃本、屋形構へて住居する壮夫おのこは……」と万葉調で書かれている男が登場する。おきくはこの銭湯の行き帰りにこの男と親しくなった。（尤もこの第三回の記事は第五回の末尾の訂正文で取消されている。「第三回中、杉の本屋形構えて云々と掲げしが能く聞く所によればこの尾形のお方は更に関係なしとよりて一寸ご吹聴」とあるのがそれである。抗議の投書でもあったのか、あるいはこの男の話を打切るための虚構か。訂正記事を「ご吹聴」する位ならはじめから吹聴しなければよいのに。しかし、こういう書き方が読者にとっては面白いのであろう。）

次に、熊本中からよい嫁を捜している大金持が現れ、おきくの両親は無理やりこの男と結婚させる。結婚式の翌日、昔の馴染の男から長い名文の手紙が届いた。「君独り我を置去りになし玉ひ悲難に沈む身の果を哀ともおほさぬかや……」にはじまるなか〳〵の美文である。しかし、前後の筋とは何の関係もない。熊本新聞の雑報記者がこういう恋文を急に読者に披露したくなったのかと思われる。おきくは結婚したものゝ夫と打ちとけず結婚生活はうまくいっていないと報じた第七回でこの続きものは途切れている。但し末尾で、この大金持の花聟は「飽田郡(6)川尻に住居する何某の実弟にて鎮西にその人ありと誰も知る……」と紹介されている。結婚に際してこの有名な兄に相談したところ「かの女は一度新聞紙にも載せられし程の者なればおまへの御し得らるゝこと覚束なし」という判断であった。兄の意見に従えばよかったのに、と書いてある。

この続きものは第七回で打切ったのである。抑、ストーリーに『故郷の錦』という題との関係が全くないので作者も気になったらしく最後に「編者云、故郷の錦と云題意は今二、三回を経、結局に於て顕はすの稿既になりたれどもしばらく中止す観官左様」という一文を置いている。原稿が出来ているなら掲載すればよいのに、何故しばらく中止するのか分らない。しかし「観官」（読者）は「左様」心得て、と頼まれゝばすぐに納得して誰も憤らなかったのだ

ろう。購読者と作者との馴れ合いである。

『恋の闇路』は明治十三年九月二七日より四回（九月二七・二八・二九日、十月一日）にわたって連載された。二本木遊廓の吉元楼の娼妓・お三つの実話である。

（要旨）この女は長崎県島原の士族・高木正行の長女で、明治九年に吉本楼の主人・仁平の店で娼妓となった。しかし、契約の期間がすぎても仁平が、廃業（自由の身になること）を認めないのでお三つは島原の兄、また熊本の知り合いと相談してひそかに楼を忍び出、且つ仁平の契約違反を警察に訴えた。これに対抗して仁平も、お三つが脱け出した時に衣類、帯などを盗んだとして、これも警察へ訴え出た。警察の仁平への説諭で廃業の件は解決したが、その後も仁平が大勢を引つれてお三つを取返しに来たり、お三つの兄が再度警察へ訴えたり争いは続く。

警察で取材した雑報の連載であるが第三回（九月二九日）の末尾に「本月七日発兌の本紙雑報欄内第九項を参看あれ」とあるのに注目したい。仁平が警察に訴えた件についての注記である。読み物の途中に注が付いていて雑報記事を参照せよというのである。これは雑報記事と続きものとの関係を明示している。つまり続きものは雑報記事を編集した実録なのである。

『丸山嵐恋の意旨元』は明治十三年十月二二日より五回（十月二二・二五・二七・二九日、十一月二日）、連載された。京町の隣、新堀町に住む丸山利吉、十九歳と同じ町のお久、十六歳が親の反対を押し切って結婚するまでの経緯を細かく報じている。これなどは題名のついた読みもの（続きもの）ではあっても雑報記事の連載と全く変らない。

続きものはこの様に次第に第三面を賑わす様になった。そして、はじめはこれらはすべて熊本の町の雑報記事を元にした連載であったが、多くの続きものが掲載される様になると、なかには東京とか大阪とかの雑報をテーマとした作品も現われる様になった。

『浪枕恋の潮風』は明らかに大阪の話を書いている。但し、最終回の付記で無理に熊本との関係をこじつけている様である。この作品は明治十四年七月一六日より一〇回（七月一六、一九、二二、二三、二六、二九日、八月五、九、一一、一三日）にわたって掲載された。

（要旨）大阪中の島の商人・金森清助の一子松次郎が主人公である。慶応二年夏父の清助が亡くなる。母〝お何〟は美人で多くの男に狙われる。そのうちに近所の男とよい仲となって示し合せて家出して行方しれずとなった。松次郎は孤児となって、昔、父が手代をしていた徳島半太郎という反物店にひきとられる。その家の娘おかち、一七歳とよい仲となり、種々事件あって後、松次郎は責任を感じおかちのためを思って書置を残して家出する。しかし、神戸港から船出しようとしているところへおかちが恋い慕って追い付いた。

この神戸の宿の話が第一〇回（最終回）で、物語りとしてはこゝで途切れている。但し、この第一〇回の末尾に記者の付言が記してある。「西の果て先の目途さへ浪枕恋の潮風吹くまに〳〵当県下熊本に漂着せしは本年三月頃の事にして夫より二人は託摩郡本庄村辺にさゝやかな家をかり交睦（なかむつ）まじく暮し居と聞がまゝ書立し話も已に十回の長きに及ひたれば外に聞込し奇談もあれど其は暫し預り置て一先つ此所に筆をさし閣く益なき物語観客（みなさん）左こそ倦怠し給ひしならん（畢）」とあるのがそれである。最終回の末尾の付記で物語りが急に熊本本庄村の雑報記事になっている。読者としては何故二人が急に熊本に来ることになったのか、神戸の宿から後のことを知りたいのだが記述がない。作者は熊本新聞の雑報記者の一人と思われるが、調子よく物語りを書きすゝめるかと思うと、急にレポートが来たとか来

なかったとか新聞記者に戻る。物語の作者と報道を使命とする新聞記者と、宮本武蔵の二刀流である。物語の原稿か、報道の記事か、混然としている。しかし、この虚実相なかばする雑報記者のハナシの姿勢に読者は共鳴したのであろう。

『阿蘇の山恋路のつゞら』は明治十五年四月二一日より一〇回（四月二一、二三、二五、二六、二七、二八、二九日、五月二、三日）にわたって掲載された。

（要旨）　阿蘇山の裾野の北の里に住む昔は身分の高い男というのが主人公である。維新以降、失業していたが、去年の春、東京第二内国勧業博覧会（明治十四年三月一日より第二回内国勧業博覧会が東京上野で開催された。本田注。）の熊本県の出品の事務の仕事を得た。博覧会開催と同時に妻を残して上京し、日を重ねるにつれ東京の生活になれてくる。昼間は勤務、夜は熊本では錦絵でしか見たことのなかった吉原で豪遊する。ある日、上野公園で十八、九歳の美女を見染め跡をつけて母娘二人暮らしのその家をたしかめた。この男は仲間と別れて家を借り寄留しそこから母娘の家に進物を送り馴れ親しんだ。この家にいりびたり、ついには夫婦の約束をした。しかし、やがて博覧会も終って帰国しなければならぬが、娘は身ごもっていた。一旦帰国して、資本金を持って程なく上京するからといゝ加減なことをいって新橋駅で別れて阿蘇の家へ帰った。しかし、この娘と一緒になる気は全くない。帰国の途中も島原遊廓で豪遊、散財した。ほどなく明治十五年（本年）となり東京では男の子が生まれた。その知らせの手紙が阿蘇の家へ到着。さあどうしようか、というところ（第一〇回）でこの物語は途切れている。

第一〇回文末の付記に「此末如何になり行や未だ結局に至らずして拙なき長物語既に十回に及びたるを以暫く中止

……」とあるが、いかにも無責任で物語を完結させずに抛り出した感じである。だが、この物語は一方では、例によって雑報記事の連載、実録であって物語とこの明治十五年の実際の事件の進行とが重なっている。本来、熊本県民の模範にならなければならぬ県の事務官にこんな浮気な男がいて税金を浪費していますよ、とその昨年と本年の行状を三面の読み物として興味本位に訴えているのである。要所〳〵は注意して読めば、それと分る様に細かく正確に書かれている。その一は主人公は「阿蘇の裾野の北の里」に住い「昔は身分ある殿様」であったという。阿蘇の役場か勤務先である博覧会の県の事務所に尋ねれば誰れであるかすぐに分るのではなかろうか。(7) その二は東京の宿で仲間と別れ、某所に寄留し、そこから女の家に進物を贈ったとある。この様な細かい書き方はこれに対応するモデル、事実があったことを思わせる。その三は題名の『阿蘇の山恋路のつゞら』は阿蘇山の山道の〝つづら藤〟でもあろうが、むしろ上野の山から女の家へ運びこんだ〝つゞら籠〟を指しているのではなかろうか。この阿蘇出身の役人が恋人の家へ金品を運んだことを指弾したとも解される。熊本新聞の記者は税金を払っている県民のために、またこの新聞の購読者のために県を相手に筆を執ったのである。この続きものが十回連載された背景に購読者である熊本県民の拍手喝采を想定したい。

四　新聞小説の成立

熊本新聞の続きものを明治十三年頃から年代順に読んで解説してきた。主として雑報記事との関係に注目したが、この種の続きものの性格は明治二十年三月一〇日より一七回（三月一〇・一一・一二・一三・一五・一六・一七・三〇・三一日、四月二・三・六・七・八・九・一二・一三日）にわたって連載された『田舎兒女性質』に至って一変する。この作品はこれまで述べてきた雑報を編集した類の読み物とは全く異る。抑、これは高等小学校が舞台で、師範

学校を卒業した道田先生という進歩的な英語教師が指導にあたり、生徒は男女まぜて三十名、これらの生徒が新時代の教育をうけて育ってゆく話である。

（要旨）道田先生と、生徒では俊太郎、お貞の二人――家が隣同士――が物語りの中心である。俊太郎はそろ〳〵高等小学校を卒業するので上級の学校へ行って学問したいが、家では百姓に学問は不要といって許さない。しかし夜学（道田先生は夜学も開らき指導している）に通うのは本人の自由と認められて、道田先生の指導をうけている。一方、お貞は今年から女学校へ通学することになったが、かねていやな男と思っている金持の古田揚吉郎との縁談があり、古田家はお祖母さんの実家でもあるので、親から無理やり勧められる。その時、お貞は新時代の女性として、両親にむかってこの話をはっきり拒否する。

この場面（第一〇回・四月二日）の文章が新しくよく出来ているので、こゝで引用しておきたい。「……お貞は応答もなし得ずいよ〳〵打萎れて居るのみ嗚呼今の世の中ほど処し難きことはあらず新風習の木の芽は未だ成長せざるに旧慣習の荊棘は猶ほ繁茂して之を妨げんとす実にや新しき酒は旧き革袋に入るべからず去れど彼れは新以て旧を裂けども是れは旧以て新を害せんすと（この親は旧い慣習で新しい思想を押えつけようとする。本田注）抑も今日に当って男女自から婚娶を択びて父母の許しを得るの風習あらしめば斯る痛ましきことはなきものを支那流義の鎮圧主義はいつも斯くの如き将来望みあるあたら兒女を屈せしむと知るべしお貞は思ひ切ったる容子にて顔をあげ

ドウゾ妾の一生、嫁せぬことにお定め下さいませ

と言ひ了って涙を浮むれば……」というのがそれである。

（要旨・続き）結局、お貞は書置一通を残して家出し、道田先生と相談して、お貞の従兄弟の家にかくまって貰う。お貞の家では娘が居なくなって大騒ぎになるところで終っている。俊太郎との関係（お貞は俊太郎が好きで

ある。）その他何も分らない。途切れているのである。

この作品は物語全体として稚拙な完結しない失敗作ともいえようが、これまでの雑報記事を編集した読み物とは全く異る作風と文体、作者の意欲に驚かされる。引用文中の「支那流儀の鎮圧主義」というのは貝原益軒著『和俗童子訓』巻五「教女子法」、所謂「女大学」を指している。この書物は享保元年（一七一六）から明治六年（一八七三）まで出版され女子道徳の規範となった。この旧道徳をお貞は両親にむかって一蹴しているのである。文体は会話文は「ヤア俊太郎さんでござりますか」「ヤレ嬉れしや好い処でお遭い申しました」といった言文一致体であり、この種の新しい文章で新時代の娘の心理を描写している。

明治二十年十月二九日より一一回（十月二九日、十一月一・三・六・一二・一五・一八・二〇・二九日、十二月二・四日）にわたって発表された『情海乃漣』は専門作家として著名な「芙蓉楼主人」に執筆を依頼している。続きものの題名の下に作者名が記される様になるのは『商業小説西海之一才』（子明治二十年十月一一日より四六回）の「松廼舎主人」とこの『情海乃漣』の「芙蓉楼主人」が最初であるが、松廼舎主人[8]の方は熊本新聞の雑報記者の様である。『情海乃漣』は、第一回冒頭で芙蓉楼主人を紹介して「本紙に小説体の続き物を掲載可致候と予ねての御約束なるが……此の節は京坂にて有名なる芙蓉楼主人に請ふて其の草稿を得……編者申す」と述べている。芙蓉楼主人とは高知県出身で東京（自由新聞、絵入自由新聞）や大阪（大阪日報、浪花新聞、東雲新聞）で新聞の読きもの作者として有名であった宮崎夢柳（安政二年・一八五五――明治二十二年・一八八九）が「芙蓉散人」という号を使っているのと符号するが、なお調べてみたい。右の文章中に「小説体の続き物」（傍点、本田）とあるのに注目したい。雑報記事の連載、あるいはその種の記事を編集した実録・実話の連載、いわば「実録体の続きもの」でなく、「小説体の

続きもの」を連載するというのである。そして、この小説体の続きものについてはこの第一回に、前述した紹介文に続いて掲載された芙蓉楼主人のはしがきに次の記述がある。

近頃何れの新紙も続物となん称へらるゝ小説類を載ざること稀なりそは読み易き艶話の中に言外至妙の情致を寓せ俗談平話を以て高尚なる学理を説き婦女子童蒙の輩をして一は心意をよろこばしめ一は世態に通ぜしめ知ず識ざる間に於て大に益するところあればなり本紙その流行を逐うにあらねど又た只時勢の進歩に後れず精確なる論説と迅速なる雑報との其の中間に差挾むに嫣然有情の艶話を以てし自今瀏覧に供せんとす情を説けども淫に流れず俗に過れども雅を失はず波瀾纒綿意趣流麗聊か佳興なしとせざれば但行文の野卑を咎めず愛読あらん事を希ふになん

芙蓉楼主人謹述

芙蓉楼主人は「続物となん称へらるゝ小説類」という。その前に置かれた紹介文には「小説体の続き物」とあった。用語の使い方にニューアンスの違いがあるが、続きものは勿論、これ以前より行われている訳で、こゝでは新流行である「小説体の続き物」、つまり「連載小説」の登場を指していると考えたい。以下、この小説について「読み易き艶話の中に……」と解説しているが、これは坪内逍遙の『小説神髄』(明治十八年三月序。同年九月より十九年四月まで分冊形式で刊行。十九年五月上下二冊に合本して刊行)の説によっている様だ。抑、「小説」なる用語がそうであろうし、また「言外至妙の情致」「高尚なる学理」とかまた「世態に通ぜしめ」とかいっているのは『小説神髄』の「畢竟小説の旨とするところは専ら人情世態にあり。一大奇想の絲を繰りて巧みに人間の情を織做し、限りなく窮りなき隠妙不可思議なる原因よりして更にまた限りなき種々様々なる結果をしもいと美しく編いだしつゝ、此人の世の因果の祕密を見るが如くに描き出し、見えがたきものを見えしむるを其本分とはなすものなりかし」(小説総

論」）また「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」（小説の主眼）といった言説の影響が感じられる。

そして、これまで新聞の三面で、雑報記事と混然として一体であった雑報の連載、あるいは実録の連載が、同じ三面に同居はしても明確に「雑報」（ニュース）と「艶話」（創作）の二つの範疇に別れることゝなった。芙蓉楼主人に従えば新聞に「論説」と「雑報」との中間に差し挾んで「婦女童蒙」（女子供。江戸時代以来、草双紙など戯作類の読者大衆を指す）に分り易すい、楽しくて読んで役に立つ「艶話」を掲載して娯楽を提供し、また、しらず〳〵の間に世間・社会を理解させる、というのである。

この様な続きものゝ専門の書き手（作家）の登場、また続きものを「雑報」とは別種の「小説」とする考え方の確立によって新聞の三面の一隅におかれた続きものの性格は一変した。これまで新聞記者（雑報記者）が三面の雑報記事と続きものの両方を執筆した時代から、三面の一部を作家が独占する時代へ変ったのである。新聞社が三面の見せ場として購読者の人気の高かった続きもののスペースを作家に任せることになった。新聞社をデパートにたとえるとすればデパートの直接の管理から切り離して地下だけは作家達の名店街に譲ったのと同断である。この様にして専門作家の登場と小説体の続きものの掲載――熊本新聞の場合は芙蓉楼主人が執筆したこの明治二十年十月――によって新聞の三面の一隅が最も多数の読み手を持つ新聞小説の発表の場となった。このことをわが国の近代小説の多くが明治以来今日まで新聞小説として発表され、新聞の多数の購読者に読まれたことゝ考え合せ、その源流として確認しておきたいと思う。

但し、専門家による小説体の続きものが登場した時にはすでにこの続きものの形態――新聞の雑報欄（三面）のスペースの一部に位置すること、今日の新聞小説と同様に小説欄の中央三分の一は挿絵である（絵入り続き物語）ことなどは決まっていて、以後も今日まで変更はない。雑報記事の連載、雑報記事を編集した実録・実話の連載の形式が[9]

絵入り新聞などの三面において明治初年に形成され、変ることなく引継がれたのである。従って新聞小説は内容は新時代の「小説」であっても形式・形態は新聞の三面の絵入り雑報記事連載の形態そのまゝであった。古き皮袋に新しき酒を盛ろうというのである。

なお以下、この作品の要旨を記したが、冒頭の挨拶と較べて竜頭蛇尾の感を免れない。代作か。筋も完結していない。前述した第一回冒頭の芙蓉楼主人を紹介した文章末尾に「編者申す」とあるのが気になる。この編者というのは松廼舎主人[8]と推定されるが、あるいはこの作品は芙蓉楼主人の原稿があったとしてもかなりの部分はこの記者の編集にかゝる作なのではなかろうか。

（要旨）　大阪中之島公園の北、堂島川の縁に沿って稲野とよ（長唄師匠か）の数寄屋造りの家があった。二階に熊本出身の学校の助教・十河賢三郎が下宿しているがこのところ神経衰弱で学校も休んでいる。同じ熊本出身の助教・山口伴九郎が新地の芸妓・若春が十河とよい仲となったのを嫉妬し、尾鰭をつけて学校で言い触らし、そのため十河は神経を病んだのである。このお豊の家へ若春がしばしば十河に会いに来る。

中の島公園の西洋料理自由亭にて山口伴九郎が部下の教員の横崎また林（熊本出身）に御馳走している。近頃、若い壮士たちが東京へ集合して騒いでいるが、誰かに煽動されてのこと、この風潮がわが学校に伝染しては一大事だ、ついては十河が生徒に教唆するかもしれないので注意せよ……と山口が十河を中傷している。

若春の自宅では養母おみや、そのつれあい伝六が山口旦那の申入れに従って世話になる様強く勧める。若春従わない。山口等は策略をめぐらし、林の伯父にあたる熊本県士族林多十郎を大阪に呼び出し、十河が女に溺れて登校しない、と様々悪口を言い、林の愛嬢との婚約を解消するか、十河を熊本へ引戻すか、いずれか処置する様迫る。この頑固一徹・肥後モッコスの旧士族は嘘とは知らず十河の非行を大いに憤る。山口伴九郎のたくらみは

成功し、若春は山口の世話になる様迫られ、また十河は林多十郎に強意見されいっそのこと職を辞して他国へ行こうと覚悟をするが、その前に一度若春と逢おうとする。

以上、筋は完結せずに終っている。末尾に近く熊本の百貫港から六甲丸で身分いやしからざる娘（多分、林の愛嬢であろう）が大阪川口へ（当時の航路。肥後米もこれで運ばれた。）着く場面があるが何のことか分らず打切りになっている。この作品は大阪の話であるが主要な人物は全部熊本の人、伯父にあたる旧士族の老人まで熊本から出て来る。創作ではあるが、同時に熊本の実話としても読める様読者のため配慮したのである。

『当世気質熊本の新世界』は松廼舎主人の作で明治二十一年五月一日より二四回（六月三〇日・第二四回まで）にわたって連載された。この作品は坪内逍遙（筆号、春廼舎おぼろ）の『当世書生気質』（明治十八年六月より十九年一月まで、分冊形式で発表）の手法をそのまゝ熊本の書生達の生活とこの明治二十一年の熊本の社会にあてはめて成功した風俗小説であり、当時における逍遙の『当世書生気質』の影響力の大きさが察せられる。毎回、題号のほかに内容を表わす見出しの副題を付けているが、第一回は「桜花咲きそむる水前寺公園の大賑合」とある。これは『当世書生気質』の第一回「鉄石の勉強心も変るならひ飛鳥山に物いふ花を見る書生の運動会」と対応する。第二回で水前寺の料亭「一日亭」から出て来た登場人物、会社の頭取（四十歳位）、その番頭、代言人（二七、八歳）及び芸妓二名は、『当世書生気質』で飛鳥山辺の扇屋から出て来た旦那と番頭、代言人、及び芸妓と対応する。医学校や高等商業の熊本の書生達も『書生気質』の東京の書生連の描写に準じているのである。

第八回では書生の松田の下宿の六畳の部屋に中山という仲間が遊びに来るが、松田は「……近来丸善書店出版に係るベインの英和対訳辞書を枕にし文学士春廼舎おぼろ先生の著なる書生気質を眺めつゝ頻りに其趣向と健筆とに感服

し、ただ時々、甘いナア〳〵の独言を……」と描写されている。この作品が『当世書生気質』の構想をそのまゝ当て嵌めて熊本の書生の生活を描写したことは明らかである。また、第二四回（最終回）に「抑々本篇の眼目とする所は専ら世態人情を写し出すにあり。既に以上稿を重ねて綴りしところをもて其眼目は漸く終りぬ。取別け書生代言人芸妓等の腸を抉りて説き尽しぬ……」と述べているのはこの作品が『小説神髄』を著した坪内逍遙の深い影響を受けていることを示している。逍遙は「小説の主脳は人情なり世態風俗これに次ぐ」（同書、小説の主眼）と述べている。また、「小説の主髄は人情世態を写すにあり彼の勧懲を主髄となし又は政治上の寓意をもて其眼目となすが如きは真の小説の旨に違へり……」（寄書—明治十八年八月四日、自由燈第三百二十九号「小説を論じて書生形気の主意に及ぶ」）も同趣旨である。小説というものは目の前のありのまゝの人間乃至人の心やまた社会の生活、風俗習慣を描写するものであると主張しているのだ。『熊本の新世界』の作者・松廼舎主人はその様な坪内逍遙の主張と『当世書生気質』における実践を学んで明治二十一年五・六月の熊本の風俗を二本樹遊廓の芸妓の言語、風俗の進化まで含めて新しい流行を描写しようとする努力の跡がみられる。目の前の人情、世態・風俗を描写せよという逍遙の小説論が、元来、三面の雑報記事——町や村の事件の報道——と深い関係のあった新聞小説の作成にまことによく適合した指針となった。この時期の熊本の社会、風俗を描写したこの傑作が生まれたのは全くこの逍遙の文学理論のお蔭であった。

『当世書生気質』は江戸の戯作文芸の世界から脱け切れず、遊里の描写に多くの筆を弄し、また主人公が幼い頃に別れ〳〵となって今は遊女になっている妹と再会するといった人情本風の筋が主流となって、『小説神髄』の理論を実践した作品としては失敗であったといわれている。しかし、発表の二年後に熊本にこの様な模倣作が現われたことは当時における『当世書生気質』の社会的影響の大きさを示しているのではなかろうか。たしかに『当世書生気質』にはこれまで指摘されている様な欠陥が細部にあるとしても、しかし、遊廓と歌舞伎劇場、この二大悪所を中心とし

た文化構造の中で専ら趣味生活に徹底し、慰みの美学を追求した戯作文芸の世界とは全く異なって、こともあろうに当代（明治十年代）の大学生の生活を作品の主題として扱ったことは画期的・破天荒な仕業だったのではなかろうか。変革期の若き逍遥のこの大胆な作品によって松廼舎主人は開眼し、当代の熊本を新聞小説として描写して読者に提供することが出来たのだ。

『学校小説澗の松』は「BS寄稿」で明治二十一年六月八日より一九回（七月二四日まで）にわたって連載された。昨年（明治二十年）設立された山本高等小学校（「文部省の教育布達に基き新に設立せられたる筑後国山本郡の高等小学校」）[10]を場とし、東京、長崎で新しい教育をうけた英語教師・原田を中心に教員間の勢力争い、女生徒との恋愛問題などを扱った作品である。

（要旨）新任の原田先生は英語の担当、東京で三年、長崎の外国人の学校で四年学問した新進気鋭の教師で、開発的な魅力ある授業は生徒間の評判であった。一方、農業実験主任の田岡先生は年令も五十になるがこの開明の世の中で狐狗狸（コックリ）様を信じている様な旧態依然の有様で原田から馬鹿にされている。原田先生は、しかし、この山本郡の頑固保守党の懇談会で、この集りに出席しないことが問題になっており、才力はあるが主義が異る人物として嫌われている。

女生徒の兒島シゲは原田先生に好意を持っている。裁縫教師・山尾ラクは原田の母親からよい生徒があったら原田の結婚の相手にと頼まれている。山尾はかねて立派な生徒と思っているおシゲを勧める。原田もおシゲをすぐれた娘だと思っているので結婚することになる。しかし、学校の教師と生徒が婚姻を結ぶのは世間の評判が憚られるので内々に式をあげて二・三年は世間に披露しないことゝした。

こゝに、早熟の阿山という生徒がいて、原田が好きであった。おシゲとの結婚の噂を聞いて嫉妬する。阿山の母親も娘に同情して嫉妬する。この阿山の家へ農業実験主任を嘱になった岡田が訪ねてくる。岡田は阿山の母親と相談し、原田が生徒と密事あった様に中傷して郡長へ訴える。学校の外壁にも原田のスキャンダルの張紙が出た。阿山の母親は盛んにデマを飛ばし学校に出かけて女生徒を煽動し、それ〳〵原田の退校願書を書いて各自の戸長役場へ提出させた。校長は原田を弁護したが、この事件が「西海新聞」「日々新聞」の記事となり、原田は辞表を出すことゝなった。この頃、原田の許へ外国から電信が来た。原田の長崎での恩師、ダヴィスが京都に私立大学を造り、その教授に招かれたのである。原田はおシゲを伴い京都へ上る。原田の一年間の米国留学をおシゲが見送るところで終っている。

「作者附言」によれば当初五〇回以上の予定であったのが「近頃余儀なき事」起り筆をとゞめたとある。『田舎兒女性質』（明治二十年）と同様に学校を舞台とした物語りで、原田の長崎での師であった外国人夫妻が学校を訪ねる場面もあり、英語とかまた政党、新聞社など開化期の新しい世相を十分に取入れている。

熊本新聞は明治二十四年九月に編集局員一同辞職し、一週間休んで十月一日より紙面も一変して新しくなっている。そして十月一日より登場した続きもの『稲むしろ』（十一月二七日、第四二回まで）にはじめて挿絵が入った。今日の新聞小説と同様の形態となったのである。挿絵の掲載はおそい方であるが、以後は毎回、必ず挿絵を入れている。

（要旨）　大阪北船場で有名な大商人稲積（ずみ）伝兵衛の娘お袖が悪漢源七にさらわれて遊廓に売られる。一方、宗次郎

という孤児の少年が大阪で苦労して奉公し、稲積伝兵衛の世話になり、商人として育ってゆく。後に宗次郎は偶然、遊廓でお袖と会い、この恩人の娘を助け出してめでたく結ばれる。

大阪の話であるが、稲積伝兵衛の両親は肥後の熊本の人で、伝兵衛は十二歳で親に死に別れて大阪へ出た。また宗次郎少年も郷里は熊本、大阪で実母（熊本のひと）とめぐり会うことになっている。前出『情海の漣』と同じく地縁、血縁で、なにか一寸でも熊本との関係を、無理にでもつけておきたかった様である。熊本の購読者に同じ県民の実話として、身にしみて読ませるためであろう。

五　まとめ

「つい数年前までは、新聞社員は、おのれの新聞が連載している「小説」を小説とはいわずに「続き物」といっていた。毎日続くから「続き物」にはちがいないが、これは、大作家の「名作」に対して、なんと礼を失した呼び方であることか」と高木健夫氏は述べている。（同氏著『新聞小説史稿　一』昭和三十九年四月二五日刊、著者後記）熊本新聞を材料に新聞小説について様々考察してきたが、新聞社員の側からみれば高木氏が言っている様に要するに続き物であり、新聞社は終始変らず続き物として扱ってきたのだ。しかし、この続き物を文学（近代文学）研究の立場から「新聞小説」として把握しようとすると、その発生から成立、発展に至る歴史的な流れ、文学史が展望される。

近代文学は作品の多くが新聞小説として発表され、新聞の購読者が即ち小説の読者であった。このことを日本文学享受の重要な特徴として注目し、新聞小説の内容、作家の創作の本質はもとより、読者が直接に接するその形態――新聞紙の雑報欄（社会面）の一部を占める挿絵入り続き物語――、また文学作品を新聞紙上で鑑賞するという日本人の特殊な習慣を考察したいと思う。この様な観点から、新聞小説の歴史を、熊本新聞で検討し気付いたことを背景に

まとめておきたい。

熊本新聞について解説した様に、同じ続きものでありながらその内容は雑報記事（ニュース）から実録・実話（物語）となり、さらに新時代の小説へと移り変っている。この点について、これまで新聞小説発生についての定説とされているところを検討してみたい。まず「岩田八十八の話」である。『明治事物起源』（明治文化全集、別巻）に「新聞小説連載の始」として

〔東京絵入新聞〕の主筆前田健次郎[11]が千葉県岩田八十八の裁判沙汰を馬琴風の文に綴り、明治八年十一月三日間連載して好評を博し、続き物語の始め、小説連載の始めをなせり……（同書六一〇頁）

とあるのがそれである。件の「岩田八十八の話」というのは「東京平仮名絵入新聞[12]」（以下、東京平仮名絵入新聞と表記する。本田注）に明治八年十一月二十八日より三十日まで（百三十六、百三十七、百三十八号）連載された「雑報　はなし」欄の記事である。この東京平仮名絵入新聞は一枚、表裏両面刷りで、縦枠（内側）二五・八糎、横枠三六糎、三段組で一段は二二字詰五三行である。見出しとして項目名が掲げられ冒頭より「公聞　おふれ」「雑報　はなし」（この項が特に分量多い。本田注）裏面へ移って「投書　なげぶみ」「物価　さうば」「広告　ひろめ」が並べられ、これらの項目の下にそれ〴〵いくつかの記事が並べられている。創刊号以来の目玉として雑報（はなし）欄中の記事のなかで最も興味ある長文の記事に木版の挿絵（版画）を組み込み、落合芳幾のイラストと高畠藍泉の説明文（記事）とを草双紙風の様式に組合わせて画文一体の紙面を作成提供したことについては拙稿で述べた。[2] この「岩田八十八の話」はまさにそれに該当し、三回目の十一月三十日（百三十八号）について言えば、表の一段目末より二段目全部、三段目半ばまでのスペースをこの記事が占め、二段目中央（紙面の中央）一八行分が挿画、文章は六七行である。

（三回目・最終回要旨）　女房の浮気を憤って斬って重傷を負わせた岩田八十八は神奈川辺を逃げまどったが、女

房の死を知って殺人の罪深さを覚り、日頃信ずるお祖師様に懺悔して後、自殺しようと甲斐の身延山へのぼる。挿画には「此畫は昨日のつゞき八十八が懺悔のところ」と書き入れがあって、身延山を背景に高徳の僧が切腹しようと刀を握っている八十八を諭すところが描かれている。死ぬよりもあらゆる霊地を巡拝してせめては妻の後世を祈るのが仏の道であると教えられて八十八は巡礼の旅に出る。その後、深川のお寺の妻の墓に参り、また妻の兄にも会って許しを乞う。千葉葛飾郡に住み仏道修行に励んでいたが本年十月二十五日に召捕られ裁かれた。しかし、罪は御維新の大赦の前のことなので減ぜられ、懲役八十日の軽い刑に処せられることになった。

右にみられる様に明治八年十月二十五日に判決あった刑事々件を報ずる雑報記事である。この記事は連載されたという点がこれまでと異なるが、内容、手法はこの新聞の創刊以来の特徴であった絵入雑報記事と全く同種である。一回限りであっても三回であっても文章そのものに、ニュースの報道であると同時に戯作風の虚実ごちゃまぜの面白さがあって（高畠藍泉の筆であろう。）庶民のよき読物であった。この「岩田八十八の話」に質的な意味でそれまでとは異なる「続き物語の始め、小説連載の始め」（『明治事物起源』）という歴史的評価を与えるのは無理ではなかろうか。

この種の連載が生じた理由としては私は専ら外的要因として、第一にこの様な長編の雑報記事を読者が歓迎したこと（読者の興味の存する限り書き続けるのがジャーナリズムの原則である。）を考えたい。また第二として、本稿では触れる余裕がなかったが、同じテーマであれば何回分でもあらかじめ図版（版木）を用意しておくことが可能である。新しい事件に対応して雑報記事、特にその図版を速成することの困難さと較べて続きものの作成は時間の余裕がある。読者の拍手喝采と図版の準備の容易さとが重なって雑報記事の連載が始まった。事柄は作者の内面の問題としてではなく、読者と紙面作成の技術の側面から考えた方が分り易すい様だ。

次に新聞小説の嚆矢とされる「金之助の話説」に触れたい。この作品は「東京絵入新聞」に前田香雪[13]（健次郎）が連載したもので明治十一年八月二一・二二・二三・二四・二五・二七・二八日、九月三・四・五・六・七・八・一〇・一一・一二日、計一六回にわたって掲載された。

『要旨』　新右衛門町の澤瀉屋という小道具屋の次男で先頃から芝口一丁目へ分宅して居た染谷金之助、一九歳が主人公である。吉原の品川楼へ通い、また数寄屋町の小蝶（一八歳）という芸者とよい仲となって家を勘当される。一時は金に詰まって自殺しようとしたが、小蝶に励まされて大阪へ出て商売して成功しようと旅立った。しかし、お供の悪番頭にだまされて一文無しとなる。苦境に陥ったところを北の新地の芸者・小龍に助けられ西京新聞の呼び売りとなって生活を建て直した。その堅気の生活が東京にも伝わり親許から勘当を許される。そこで小龍には礼を尽くして別れ、東京へ帰って小蝶を妻として商売に励んだ。

金之助の行状を取材した絵入り雑報記事の連載である。長編の（回数の多い）物語で読者の好評が察せられるが、「某々の噺」[14]という続きものはこの頃頻繁に掲載されており「金之助の話説」もその中の一つであって特別な連載ではない。例えばこの年の四月二一日より「鹿島宗次郎の噺」、四月二八日より「お菊の噺」、八月二九日より「鈴木芳太郎の噺」といった風にである。「金之助の話説」をこれらとは質的に異なる特別な記事とする根拠は何等見当らない。「金之助の話説」は、他の連載記事も同様であるが、各回の冒頭や末尾に「怒を含む一段はまだ長ければ明日委しく」（文末）とか「昨日の絵入金之助の続き」（冒頭）「以下、次号」（文末）などとあり、八月二十八日の末尾などは「烟草入を我が腰へ差すところまでは彼地の通信者から報知がありました故跡は又探訪の上再び通信のありますまで一寸幕を引きますから看官どうぞ其お積りで……」とオーバーに記してあるのが可笑しい。現地の「報知」「通信」「探訪」に基いて記事を作成するという建前と筆にまかせた調子のよい「噺」と、虚実半ばする戯作の文章で読者を

引張って行ったのである。この種の書き方は、元来「雑報（はなし）」欄の記事に小新聞発生の日からみられた所謂三面記事執筆の本質的手法であった。面白く書かねば人気が出ない。売れない。いずれにしろこれらの記事には購読者相手の記者稼業の功罪がみられる筈である。「金之助の話説」が好評であったことは察せられるが、これはあくまで雑報記事の連載であって、他の「某々の噺」と質的に区別することは出来ない。この点、この作品を新聞小説の嚆矢とする従来の説にいま一歩の説明不足、隔靴掻痒の感を禁じ得ないのである。明治のはじめ戯作者や浮世絵師が作成した小新聞の絵入り雑報記事がどの様にして新聞小説に移り変っていったかという近代小説の成立、また江戸文芸との接点を示す重要な一齣がこれでは解明出来そうもない。

といっても私にその点についての明確な結論がある訳ではない。たゞ、今回、本稿のテーマである熊本新聞を読んだ限りにおいては、繰り返すことになるが、この新聞の三面の中で雑報記事の連載が始まり、次にこれらの雑報を編集した実録・実話が見出しの表題（作品名）を付した物語[15]として連載された。そして「小説」という用語がはじめて登場するのは明治二十年十月二九日の三面「情海の漣」第一回に「小説体の続き物」（松廼舎主人）、「続物となん称へらるゝ小説類」（芙蓉楼主人）とあるのがそれであり、雑報また実録とは全く別種の創作としての「小説」の概念また実作がこの頃、現われた様だ。そしてこれが坪内逍遙の『小説神髄』の説によっていることは前述した。翌二十一年五月一日より連載された松廼舎主人の『当世気質熊本の新世界』が『当世書生気質』に拠っていることからも逍遙の小説論との関係が察せられる。明治二十年頃の熊本新聞三面に速くも『小説神髄』や『当世書生気質』の分身が現われたのである。

特に『当世気質熊本の新世界』は『小説神髄』の小説観に基づき『当世書生気質』を模倣してこの明治二十一年の熊本の社会を描写した作品である。著者・松廼舎主人が自信をもって今の熊本を描写して読者に提供出来たのは全く坪内

逍遙の新しい小説観に拠ったからであった。医学校や高等商業学校の生徒の生活を中心に二本木遊廓の芸妓の言語、風俗の流行の細部まで明治二十一年の熊本を意識して克明に描写している。人情、世態風俗を写すのが「小説」であるという逍遙の説を信奉しているだけに、同じ熊本の描写であっても、従来の斜に構えた、あるいは悪ふざけの雑報・実録の続きものとは別種の新鮮で堂々とした文芸として読者に迎えられた。『小説神髄』『書生気質』の影響によってこの様な、今の熊本の社会を描いた作品が新聞に登場して、熊本新聞の購読者が読んだことの社会的意味は大きい。

読者にしてみれば東京の坪内逍遙先生の提唱された「小説」という新しい第一級の読物の中に今の熊本の社会と庶民生活が、つまり自分達の暮らしが描写されているのである。このことは購読者すべての驚きであった。江戸時代以来、文芸に庶民が登場するのは狭斜の巷か裏長屋の熊さん、八っさんか、社会の底辺の存在として、しかも笑いと滑稽のポーズを通して斜から描写されることに甘んじてきた。ところがこの作品には書生を中心にサラリーマンや商人や兵隊や鉄道（これは冒頭で一寸触れている）や、開花期の熊本の全貌が描かれている。二本木遊廓の芸妓は白昼にも堂々と登場してしゃべりまくりその言語や風俗の流行がこと細かく描写された。江戸文芸の抑圧されて斜に構えた、あるいは居直った暗さが全くない。これが新しい「小説」という読物なのだ。熊本新聞の読者たちは（彼等あるいは彼女等の先代の大多数は庶民層、熊さん、八っさん、また所謂、婦女童蒙であった筈だ。）今や自分達が主権者となった文明開化期の社会の新しい読みものとして、自分達庶民層も登場する「小説」を大歓迎したことであろう。

そしてこの頃（明治二十—二十一年）この種の新文芸が現われるのと同時に新聞記者（雑報記者）が三面の「雑報」と「続きもの」の両方を執筆した時代は終って、三面のスペースの一部が新聞社や新聞記者とは直接関係のない「新聞小説」専用となり、独立した作者がこれを執筆することゝなった。繰返しになるが、作者がこのスペースを任

された時には明治初期からかたち造られた「絵入り続きもの」の形態は確立しており、作者は内容はともかく、形態はこれをそのまゝ継承してその後も、今日まで変更することはなかった。私は熊本新聞を読んで以上の点に注目したのである。

最後にこの新聞を読みながら新聞小説の発生一般について考えたことを今後の研究の立脚点として記しておきたい。まだ確かめねばならぬ多くの点を含む蛇足である。

坪内逍遙が西欧の文学を研究して、小説は人情、世態を写すものとの画期的な論を発表するに至ったのと併行して、この文明開化期に新しく誕生した新聞（小新聞）の三面において、雑報記事の連載、また実話の連載が全国的に流行した。江戸時代以来の戯作者や浮世絵師がこの三面で活躍し、彼等がもと〳〵得意とした庶民生活描写の筆——戯作者としては三馬、一九、春水から魯文の流れ、戯作文芸としては滑稽本、人情本、草双紙合巻を考えたい——が毎日、膨大な量の雑報記事、また実話を作成した。私はこれらの雑報を読む度に裏長屋の女房族の描写が得意であった三馬や旅籠屋の飯盛女をからかうどんちゃん騒ぎをいき〳〵と写した一九の筆を想起した。文明開花の最先端を行く全国の新聞紙（小新聞）の中にまぎれようもない江戸の戯作文芸が雑報記事となって溢れ出した観がある。

戯作文芸はまた稗官小説、稗史とも呼ばれた。元来の意味は、小官（あまり偉くない役人）が天下国家の政治・大問題とは関係のない街談巷語、街の噂話・さゝやかな話題を探訪して王者に奏上して民間のことを知ってもらうという意味で、よく江戸文芸の性格を表している。『小説神髄』においても坪内逍遙はよくこの語を使い、「稗史」を改良、進歩させてすぐれた「我が小説」を造ろうと提唱している。「おのれ幼稚より稗史を嗜みて、いとまある毎に稗史を閲して貴き光陰を浪費すること已に十餘年に及びにたれば、流石に古今の稗史に関して看得たる所も少からず、且また稗史の眞成の主眼は果して何等の辺にあるやも稍々会得しぬと信ずるから、いと嗚呼がましき所為とは思へど、

敢て持論を世に示して、……」（緒言）といった言説が各処に見出せるのである。そして、江戸時代においては「稗官小説」「稗史」という呼称は権力者に対して庶民文芸を卑下した呼び方であったが、今や市民社会の成立する文明開化の時代である。かつての庶民層が市民に格上げされて新時代の主権者となった。この時、「稗史」の書き手であった戯作者たちが小新聞の雑報記事を書いて市民に提供している現実、新聞における稗史の復活を坪内逍遙はどうみたであろうか。[16]「稗官」とは新聞記者のこと、「小説」とは雑報記事のこと、そして王者・権力者は市民と置き換えてよい御時勢であった。

私は、少くとも熊本新聞の三面においては、いわば稗官の報告、稗史にあたる雑報記事およびその連載と坪内逍遙の小説論「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」（『小説神髄』「小説の主眼」）は相提携した様に思える。前述した『情海乃漣』第一回（明治二十年十月二九日）冒頭の挨拶「本紙に小説体の続き物を続々連載可致候とかねての御約束なるが……」はこれまでの実録・実話の続きものに新しい小説の連載が加わることを示している。この時点で、雑報記事と小説が合体したのだ。大袈裟にいえば、明治二十年頃、新聞の三面の「絵入り続きもの」という形態の中で「稗史」と新しい「ノベル」が結合したのではないだろうか。私はこゝに新時代の市民のための「新聞小説」という読みものの誕生を考えたいのである。[17]

終りに、本稿の調査については熊本日日新聞社森茂氏、同社新聞博物館、またいつもながら東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫、国立国会図書館新聞閲覧室のお世話になった。附記して厚く御礼申上げたい。

注

(1) 熊本県ははじめ白川県と称した。後、明治九年二月二二日、熊本県と改称。新聞紙名もこれに対応している。

(2) 取り敢えず小論二篇をまとめて諸家の御意見を頂戴した。「草双紙合巻から新聞小説へ――開化期文化の底流――」（国文学研究資料館紀要　第14号）「版木から活字へ――稿本の終焉――」（国語と国文学　昭和六十三年十二月号）

(3) 国文学研究資料館第29回公開講演会、昭和六十三年十月二十九日（土）午後二時より、会場、熊本市立図書館。「挨拶」国文学研究資料館長・小山弘志　「熊本の文明開化――新聞小説の発生――」国文学研究資料館教授・本田康雄　「細川幽斎の文事」熊本大学教授・荒木尚。

(4) 白川新聞ははじめ冊子体（縦一九・五、横一三糎。一三丁。各丁一一行、二六字詰。）で刊行され、のちタブロイド版四頁仕立となった。（各頁四段。各段二三字詰二九行。）活版社（熊本区塩屋町）発行、社長（編集印務長）は旧肥後藩士水島貫之。月二回の発行であったが後月三回となり、最初は県下の三五〇の戸長役場（のちの町や村の役場）に配ることでスタートした。明治九年二月二二日、白川県から熊本県と改称されたとき熊本新聞（同年三月二〇日、五二号より）と改題した。（森田誠一、花立三郎、猪飼隆明著『熊本県の百年』山川出版社刊、参照）。

(5) 三面の雑報記事――犯罪、珍事、男女のスキャンダルなど――を中心とするタブロイド版（大新聞の半分）の新聞。文章は平易な言文一致体で総ルビ付の大衆紙。

(6) 飽田郡は明治二九年に託摩郡と合併して飽託郡となった。

(7) 有名人であれば特に調べる必要もなく読者は新聞を読んだだけで直ちに了解したであろう。

(8) 明治二十年（本年）十月十日の三面で松廼舎主人は、自作『西海の一才子』への投書に答えて「主人は敢て日々編輯局に出入して筆を持るにあらねば字句若くは譯字の時々誤りあるは主人の罪には候はで校正記者の不注意と申すも不可なかるべし主人は平素は劇務に従ふ者なれば……」と言う。劇務はきびしい忙しい仕事。雑報の取材で忙しいのであろう。この頃の熊本新聞の三面を支えた記者である。

(9) 新聞小説の挿絵の源流については注（2）の小論で述べた。新聞錦絵、また「平仮名絵入新聞」の三面の雑報欄の挿絵に注目したい。但し、熊本新聞の場合は挿絵が入るのは明治二十四年からでそれまでは本文だけである。ここでは特に熊本新聞について述べたのではなく新聞小説一般の場合についての指摘である。

ついでに附記しておけば雑報欄の挿絵は、大阪朝日新聞の場合は、明治一七年三月に廃止され、以後は「続きもの」が挿絵

を占有することとなった。そこへ「小説体の続きもの」が登場したのである。「……その後三年を経た明治十七年の三月末には、雑報記事に挿入した版畫の掲載を廃止して、それ以来はかの鮮麗艶妖な版畫が永く小説のみに占有されることになった。……」（大阪朝日新聞社刊『五十年の回顧――創刊五十周年記念』二七六頁）このことの意味をいずれ別稿で考えてみたい。

(10) 明治十九年四月一〇日小学校令を公布。尋常小学校四年、高等小学校四年の二段階とし、尋常小学の課程を義務教育とした。（文部省編『学制百年史』資料編）

(11) 天保一二（一八四一）――大正五（一九一六）年。本名夏繁、のち健次郎。国学者前田夏蔭の子、国学を研究し、古筆の鑑定家、古美術に精通した。明治初期の小説家として有名。しかし、この明治八年十一月の頃は東京平仮名絵入新聞の印務編輯長代理は高畠藍泉であった。前田健次郎の筆とするのは疑問。

(12) 明治八年四月十七日に「平仮名絵入新聞」（第一号）が創刊され、同年九月二日より「東京平仮名絵入新聞」と改題、のち明治九年三月「東京絵入新聞」と改題した。社主・落合芳幾、印務編輯長代理・高畠藍泉、東京銀座一丁目十三番地　絵入新聞社刊。

(13) 注（11）参照。なお、柳田泉は染崎延房（二世為永春水）をこの作品の作者としている。この頃の東京絵入新聞の奥付では「局長前田健次郎　假編輯局長箱田千代太　印刷人染崎延房　本局　東京銀座一町目五番地　絵入新聞両文社」となっている。「東京平仮名絵入新聞」の明治九年一月四日は「草双紙にてお馴染の為永春水」の入社を告げ「三千万余のお客さまがたエ」として「絵入新聞の売初に為永さんの入社を祝ひて　世乃人の為ながかれと山の井の浅きを汲める春の水莖　横浜神奈垣魯文」と魯文の狂歌を載せている。人気者・二世為永春水作、前田香雪校閲といったところか。

(14) 用字は「話説」（金之助の場合はこれである）「噺」「はなし」など様々。項目名（欄名）の「雑報」に対応していて、用字にはこだわっていない。

(15) 例えば「恋衣故郷の錦」（明治十三年九月より）。「岩田八十八のはなし」は勿論、「金之助の話説」も形態は雑報記事の一つとして書かれている。

(16) 坪内逍遙は雑報記事にみられる様な草双紙風の文章を改良して新しい小説を作成することを勧めている。「……而して草冊子の文の如きは最も世話物に相適ひて且つ改良に便なる物なり。我が将来の小説作者はよろしく此体を改良して完美完全の世話物語を編成なさまく企つべし。世の活眼なき似而非学者は我が草冊子の文体をばいと鄙びたりとて罵れども、さるは小説の何たるを解せざるに出でたる謬錯のみ。小説は人情及び風俗を活るが如くに叙しいだして読むものをして感ぜしむるを其目

的とはなすものなり。……中略……因云。此間の傍訓新聞紙に掲載せる所謂続話の雑報の如きは、おほむね革冊子体の文章なれども、多少の改良を加へたるものなり……」（『小説神随』下巻、文体論、第三雅俗折衷文体）逍遙は新聞の雑報記事が庶民に分り易い草双紙の文体で人情、風俗を描写したのを好意的に支持している様である。因に、逍遙は読売新聞の紙面の改良に当った。「十七年一月更に又紙面を改良し、文学士坪内逍遙を聘して、之に嘱するに文学の事を以てし……」（読売新聞、明治二十四年五月十五日、第五千号附録　○読売新聞沿革略）

(17)　続きものによく登場する時代もの（歴史小説）については別稿を用意している。時代物は説話・昔噺でありまた庶民生活と密着した講釈、落語など話芸の伝統があって江戸と近代との壁がなく比較的容易に続きものに掲載されている様である。

稗史・戯作の中に読本・合巻（時代もの、過去のはなし）、滑稽本・人情本（世話もの、今・現代のはなし）の二種があったとすれば前者は比較的容易に続きものに登場し、後者は坪内逍遙の理論に便乗して「小説」と結合、乃至は新しく看板を塗りかえて、結局、稗史は全部、今日まで新聞小説の形態の中に生き残ったのではなかろうか。新聞小説のスペースの中央、三分の一を占める挿絵を眺めながら稗史の残骸の感を深くするのである。新聞小説は歴史小説（時代物）も現代小説（世話物）もすべて今もなお、江戸の稗史の絵解き物語なのではなかろうか。我が国では、特に地方においてはどの県、市、町、村も専ら地元の新聞が読まれている。必要のある人だけ重ねて中央紙を購読するのである。天下国家のことは後まわしにしても地元のおつきあいの義理を欠くことは許されない。地元の情報が最も重要なのである。地方紙の社会面に雑報、所謂三面記事とともに必ず掲載される新聞小説の全国にわたる毎朝、毎夕の膨大な量を考えたい。この様な文芸と雑報記事のあり方を考えると、よくも悪しくも、これらの新聞の購読者一般にとっては近世（肥後）と近代（熊本）との文化あるいは生活上の断絶は存在しなかったと熊本新聞を読んで感じたのである。

熊本新聞続きもの年表

明治一三年（一八八〇）

九月一日・七回　恋衣故郷の錦　＊

（初出月日・回数・題名・＊は本稿で解説した作品）

九月二七日・四回　恋の闇路　＊
一〇月二二日・五回　丸山嵐恋の意旨元　＊

明治一四年（一八八一）

一月八日・一二回　臼井六郎復讎記事
四月一六日・三回　一席の講談煙草の媒妁
七月一六日・一〇回　浪枕恋の潮風　＊
七月二三日・六回　薩摩潟沖の逆浪（さつまがたおきなみ）
八月二〇日・回数未詳　松尾の浦蘆辺の船宿
八月二五日・四回　呉竹の雪折
九月一〇日・四回　詠もよし田毎の月
一〇月六日・七回　赤縄の羈絆
一一月二三日・一〇回　浮世の夢

明治一五年（一八八二）

二月一九日・三回　草枕仮寝の縁
四月二一日・一〇回　あその山恋路のつゞら　＊
六月一七日・三回　園の呉竹
六月二五日・三回　栄枯盛衰花散里

明治一七年（一八八四）

一月四日・数回（古聞新話）筑紫の奇縁
二月一三日・二六回（不倶戴天）孝子実録
四月九日・二〇回　路傍の桜

明治一八年（一八八五）

一二月一三日・一三回　旅衣襤褸（つゞれ）の錦

明治二〇年（一八八七）

三月一〇日・一七回　田舎兒女性質　＊
一〇月一一日・四六回　（商業小説）西海之一才子（松廼舎主人作）
一〇月二九日・一〇回　情海の漣（芙蓉樓主人作）　＊
明治二一年（一八八八）
一月四日・二九回　（西海之一才子）南洋之偉業（松廼舎主人作）
一月五日・数回　燈下の疾風
四月一〇日・七回　棘中の嫩
五月一日・二四回　（当世気質）熊本の新世界（松廼舎主人作）　＊
六月八日・一九回　（学校小説）澗の松（ＢＳ寄稿）　＊
明治二三年（一八九〇）
一月五日・八回　撰挙人（愛夏子作）
明治二四年（一八九一）
三月一三日・一四回　樓上の月（肥筑山人）
四月七日・一〇回　乱れ柳
一〇月一日・四二回　稲むしろ（桜園散史）　＊
一一月一七日・回数未詳　（忠孝美談）柵らみ草紙（桜園散史）

（参考）雑報記事の連載

明治一二年（一八七九）
六月四日・二回　遊君おけいの伝　＊
明治一三年（一八八〇）
六月三〇日・九回　節婦おともの話　＊

（以下　省略）

八月六日・三回　南田島村おハルの話
八月八日・五回　洗馬橋辺おハツの話

明治一四年（一八八一）

二月五日・三回　おタケの話
二月八日・三回　おと寿太十の話
五月五日・三回　寡婦お豊の話
六月二〇日・六回　高口某の話　＊
七月八日・回数未詳　藩士大河原某の話
七月一六日・回数未詳　河原田儀平の話

（以下　省略）